

巻頭エッセイ

そこに見える景色



一般財団法人民事法務協会 副会長 小口 哲男

生まれてから70年近くも経ちますと、ときに大概のことは経験済みで分かっていると感じることがあります。

自分自身で経験できることなどほんのわずかで、やれていないことの方がはるかに多いのですが、新しいことに挑戦する意欲が減退するためか、何かやらなくては・・・という焦りに突き動かされるといったことが起きにくくなっているように感じます。

人間は、生きている間は、一瞬も止まることなく動き続けるもので、細胞レベルでの活動により（それが止まることは、死を意味しますが）新しい身体という環境が作られ、また違った生き方をすることになるものと思います。それが、成長であり、老化であると思いますが、一度として同じ状態で物事を考えることはないということだと思います。

ところで、話が私ごとの昔話になって恐縮ですが、娘が小学生の頃、転校した小学校にマーチングバンドがあり、そのカラーガード（バンドの周りで旗を振るなどのパフォーマンスを行う。）に入るようになりました。

恥ずかしながら、その頃まで、マーチングバンドの存在も、それに全国大会があることも知りませんでした。

しかし、娘の入ったマーチングバンドは、これまでかなり良い成績を残していたよう

で、前橋市の競輪場を使って行われた関東大会で勝ち上がり、武道館で行われる全国大会に出ることになりました。

子どもの課外活動では、保護者によって活動が支えられるのがほとんどですので、私も、保護者兼スタッフとして付いていきました。

このため、生涯行くことはないだろうと思っていた競輪場に行くことができ、これまた今後もあり得ないと思われる武道館にスタッフ口から入るという経験をする事ができました。

結果ですか・・・？

厳しいことで有名となっていた指導者の先生は、この大会が指導する最後の大会ということで、子どもたちに、決勝の演技は、自由にやりなさいと言い、これに従って充分に間を取って演技したことから制限時間オーバーとなり、失格でした。

これらのことは、全てその立場にならなければきっと見る事がなかった景色であろうと思います。

これと同じような思いをさせてもらったことは、まだまだほかにもたくさんありますが、昔話は、またの機会とさせていただきます。

仕事においても、眼の前の景色が一変するような経験は、たくさんありました。初めての仕事をするときには慣れるまでに3か

月くらい掛かるのは普通だけれど、3か月過ぎてても慣れない場合は能力がないとみなされると言われていたにもかかわらず、1年サイクルの仕事である予算の仕事に就いたときに、3か月過ぎてても慣れることができなかつたため、皆さんが通る廊下の片隅で上司から大声で叱られたとき、総務課長になった異動先の地方法務局で、自分を含めた新任職員を紹介する全体会議の検討中に、進行は誰がするのだろうと考えて自分がやるんだと気づいたときなど枚挙にいとまがありません。

そうはいつても、それまでの経験を基にこれから行く先で見える景色を想像して進むしかないのが人間だろうと思います。しかし、行った先に見える景色は、その時点に至るまでの経験がさらに加わっています

ので、当然、想像していたものとは異なつて見えているはずであると思います。ただ、往々にして異なっていると気付かないかもしれません。。。

これらのことは、歳を取つても同じように繰り返すものだと思います。しかし、歳を重ねてくると、感受性が錆び付いてくるのか、行った先で見えている景色をそのまま受け入れることが難しくなってくるようで、どちらかというところまで見たことのあるいずれかの景色と重ねようとする傾向が出てくるように思います。

人生80年としてもまだ10年と少しはありますので、感受性が錆び付くことがないようにヤスリをかけ続けながら過ごしていきたいと思っている今日この頃です。